
意地悪なひと

メリィ山田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

意地悪なひと

【Nコード】

N7539T

【作者名】

メリィ山田

【あらすじ】

意地悪なひと、わたしの幼馴染み。ずっとずっと、好きでした。はつこい、でした。でも、そろそろこの想いとオサラバしたいのです。ちよっぴり卑屈な女の子と、おなか真っ黒に見せかけてじつは純情？な幼馴染みくんの、ありふれた告白のはなし。

そのいち、（前書き）

無謀にも連載にチャレンジしてみました。
そしてさらに無謀にも告白の話です。

.....。
広い心でお読みください...！

そのいち、

なんて、意地悪なひと！

いいえ、わたしは知っていました。天使のようにきれいな彼が、その実おなかの中はまっくろなこと。オプションで悪魔のツノとハネだつてつけちゃいます……あ、ステキ。じゃなくて！！

じわりとにじむ涙を感じて、わたしはきゅつと唇をかみました。涙が似合うのは、きれいでかわいひとだけだ。わたしみたいに、メガネに三つ編み、野暮ったさが服を着ただけのような人には、涙がもつたいたない。それに、幼い頃でさえ、泣き顔を「不細工」と称されたわたしです。それも、今私の胸の中から住みついて離れない張本人に、です！

なんて、………残酷なひと。

先程まで走っていたからというのとは別に、心臓がどくどくどくどくとうるさい。第三校舎南側の階段下の隙間に身をひそめて、ついにわたしはこらえきれずに嗚咽を漏らしてしまいました。カエルみたいな声、と心のどこかで失笑しているわたしがいるのに、涙は止まりそうもありません。

体育座りをして膝に顔をうずめて泣きました。わたし、なんてみじめ。つい先程、告白した相手からは相手にもされず、その場で他のひととの、き、キスシーンを見せつけられるなんて。

何もわたしだつて、本気で相手からの色よい返事を期待していたわけではありません。むしろ、覚悟していました。

「は？何を言ってるの？冗談、だよな？一緒に病院行ってあげようか？」

とか

「悪いけどブスとか本当、ありえないから。一秒以内に僕の前か

ら消えて」

とか、きれいな笑顔で、

「死んで？」

などなど、考えられるシチュエーションは全て。ここ半年、妄想に妄想を重ねてきたのです。

考えるたびにみつともなくこっそり泣いていたので、今日この日、本番では決して泣かないだろうと思われたほどです。

ですが、彼の反応は、どのシミュレーションにも入っていませんでした。

わたしは、つまらない人間です。死ぬほど臆病なので、いちいち行動を起こす前にじっくりと悩みまくりたい人種なのです。そういう人間はとっさのできことに弱いのです。

想像だにしていなかった彼の反応……

「へえ、そうなんだ」

のみ。沈黙。沈黙。沈黙。

嘲笑も失笑も浮かんでいない、夢を見ているような、ぼんやりとした表情でした。

……その後、返事を待っている側のわたしが何かアクションを起こせるはずもなく、(とっさのできことに弱いのです。二度言いました)が特に大事なことはありません(二人向かい合い、固まっていたところに、3組の学年3本の指に入るとウワサされる美人さん、大川さんが、彼の腕に自らの腕をからめて、キス、をねだって。優しく、微笑んで、それに応じた彼。

わたしは、走って逃げ出すしか、道がなかったのです。

そのに、

そもそもなぜ私が叶いもしない恋を本人に打ち明ける決心をしたのか。

……長い長い初恋とオサラバする為であります。

彼とは幼稚園からの間柄です。小学校低学年の頃に彼が家族とともに私の家の近所に引っ越してきてからは、家族ぐるみで交流があります。

彼は幼稚園生の頃から天使のような愛らしさで、むしろ天使で、今思えば、出会ってその日にわたしは恋に落ちたのです。幼稚園の女の子たちはみんな彼を好きになって、先生たちはもちろんママさんたちをも虜にする地上に舞い降りた天使は、しかしその頃から大変よろしい性格をしておりました。

天然か計算か、一緒に遊ぼうと誘う女の子たちにどっちつかずな態度をとり、サキくんはマミと遊ぶのーちがうもんミクとだもんと女の子たちが彼を取り合うのをにこにこしながら見守り、しまいには女の子たちが取っ組み合いのけんかになって大泣きして先生に怒られるのにも、さらりと笑顔で「ぼく、しりません」。計算ではなれと思いたい、いやしかし天性のものでもそれはちよつと……

当時のわたしは彼の笑顔にぼけつとなりながら隅っこで一部始終を見ていたのですが、そんなことが毎日毎日毎日続けば、ちよびつと頭の弱かったわたしでも気付くというものです。そして怖いものなど雷とおかーさまが作るピーマンの肉詰めくらいしかなかった幼いわたしはついぼろりと言ってしまったのです。

「サキくん、どうしてルミちゃんとナツキちゃんがないのに

ににににしてるの？」

……………ゆつくーりと振り向いた彼の顔は今でも忘れられません。
(がくがくぶるぶる)

それ以来、いつの間にか彼の子分(下僕ともいう)という立ち位置となったわたしは彼にいじめられ、いじめられ、いじめられ、気が付くと友達が一人もいないという状況に。

それでも、彼の後ろを追いかけ続けたのは、ひとえに彼が好きで好きでどうしようもなかったからなのでしょう。友達ができなくても、時々女の子たちからひどいことを言われても、彼がわたしに構ってくれるなら、笑ってくれるなら。それが恋だと気づいたのは恥ずかしながら小学校5年生の頃でしたが。

わたしのこれまでの記憶の中で、彼の存在がなかったことはないと言える程です。それは同時に、彼に笑顔で吐かれた毒の数々の記憶でもあります。変態と罵られようが、それらはわたしの大事な宝物です。彼の側にいるだけで十分でした。

しかし、ふと考えてしまったのです。わたしももう来年は受験生。想像もつきませんが、きつとあつという間に大人になっていくのでしょう。今までは、幼馴染みの特権というやつで、いそいそと彼の側に行くことができましたが、大人になれば、そうはいきません。彼はわたしよりも遥かに頭が良いし、大学だって良い所に進むでしょう。高校受験は死ぬほど努力をして何とかギリギリ彼と同じ高校に進学することができましたが、大学受験が同じようにうまくいくとは考えてはいません(残念ながら現在の成績はお尻から数えたほうが早い、むしろお尻そのものです)。

彼とわたしの歩んでいく道は、決して、交わることはない…………。

ぞつとしました。わたしはよぼよぼのおばあさんになっても彼を一途に思い続けているのでしょうか。重い。重すぎる恋心です。初恋が、こんな痛い愛であってはなりません。叶わぬ初恋なら、きれいに、甘酸っぱく終わるべきなのです！

今こそ、この長すぎる恋を終わらせる時なのです！！

美しく散る桜に自らを重ね、そう決意した半年前のわたし。それからの日々は聞くも涙、語るも涙、想像以上に過酷な道のりでありました。彼の返事を予想しては、撃沈、毎夜枕を湿らせる日々。せめて夢の中では、色良い返事をもらえる夢でも見させてくれればいいのに、夢の中でも、彼に嘲笑され、おかげで寝不足、顔色を常に悪くしたわたしを見て、現実の彼にもまた「きもい」とドン引きされ。

ええ、本当に。本当に、ほんっとーにつ、身も心もボロボロになった半年間でありました。

しかし、今日の告白で、報われるはずだったので。

翌日彼と顔を合わせたくないから金曜日、人から見えにくいという第一校舎裏の告白スポットも押さえた。

シュミレーションは、完璧でした。

すっぱり、ぱっさり、彼に振ってもらおう。わたしは何を言われても、笑顔で、「うん」と言うはずだったので。

そのさん、

ずびつと鼻をすすって、もう一度ぎゅつとスカートに目頭を押し付けました。これまでの苦労を思えば、こんなの、ぜんぜん、ぜんぜんきつくなんかありません。だって、妄想の中では100回を軽く超えるくらい、彼に振られているんですもの。

窓の外が朱く染まりきっているのが視界の隅、板張りの廊下を見て分かりました。暗いのが怖いというようなカヨワイ女子でもありませんが、そろそろ行動を開始するであろうイニシャルGは大嫌いです。夜の学校はヤツらの支配下に置かれるのです、早く立ち去らねば、力の抜けそうになる膝を無視して勢いよく立ち上がりました。…がんと後頭部を強く打ち付け、また逆戻り。そうでした、わたし、階段下の隙間にいるんですした、うふふ、そりゃあ痛いはずですよ、自分のまぬけさも相乗して、じわりとまた涙がにじみます。

……もおやだ、やだやだやだ。むかつく、わたしのばかあほまぬけ。そもそも告白なんて、わたしには土台無理な話だったんです。わたしなんて、今まで彼の金魚のフンだったんです、フンが告白なんて笑っちゃいますよね、フンなんて所詮肥溜めがお似合いです、甘酸っぱい青春とかフンにはちょーおこがましい話なんですよあーイタイ恥ずかしい恥ずかしい、告白は、大川さんみたいな、おしゃれでかわいいステキ女子にしか許されない特権なんです……

……違う、分かってます。かわいいとか、美人だとか、そんなの関係なくて、「女の子」と呼ばれるに値する人間かどうか。わたしはフンであることに甘んじて、今まで彼に近づくために必死になるとか、彼にふさわしいひとになるために自分を磨いてみるとか、そんなことを怠ってきたのです。わたしを体育館裏に連れ出した女の子たち、あの子たちはきつと、わたしなんかよりずっと「女の子」です……褒められることじゃあないかもしれませんが、あの子たち

がわたしを恨むのも当然。『あんななんて彼にふさわしくない』
幼馴染みだからってねえ』以下略、なんて性格が悪いんでしょう、
と心の中で舌を出していたけれど、わたしのほうが救いようのない
おばかさんです。恥ずかしい。恥ずかしい、もうしにたい。

彼の頭に軽めの隕石でもぶつかってしまえばいいのに。そしてさ
っきの告白をなかったことに……

容量の少ない頭でそんなことをぐるぐる考えながら、彼を階段の
上から突き落としてみる、寝ている彼の耳元でこくはくなんてされ
てないこくはくなんてされてないと暗示を試してみる、建設的でない
思考にまで身が落としたところで、遠くのほうでガラガラと扉
を閉める音を聞きました。

し、しまったああああ！

窓の外は先程よりもオレンジ色が陰り始めています。施錠、閉じ
込められた！どうしよう、と一瞬のうちに血が引いていきましたが、
ギイギイギイギイという音とともに、誰かが走ってくる音が聞こえ
てきました。第三校舎の廊下は板張りで古く、走るとそういう音が
するので、そのギイギイの音がふいに止まりました。

知らず知らずのうち息を止めていました。今出て行って、その
誰かと遭遇してしまえば、「え？何でいるの？」「どこから来たの
？」「といついたたまれない空気にさらされるかもしれないし（第
三校舎は使用頻度かなり低く、放課後の遅い時間には誰も来ない
ような場所なのです）、かといってこのままというわけにもいきま
せん。

どうしようか、オーバーヒート気味の頭で考え始めたとき、

「どこにいるの？キリ」

少し大きな声で発されたその言葉に、ひとときわ高くわたしの心臓が鳴り響いたのが分かりました。

そのよん、

心臓が、痛くなるほどときどきときどきしているのが分かります。

……どうしよう、どうしよう、どうしよう、

「キーリー、出てーいー」

その、少し高めで、甘く耳の奥を引つ掻く声を聞いただけで、脳内に鮮やかに全体像が浮かびあってくる。わたしのすべて、ずっとずつとずつとずーっと好きな、ひと。

反射的に身体がその声に反応して動き出しそうになって。階段の下から這い出していきそうになる。

……って、ダメダメダメっ！つい先程告白して振られた、いや、振られたかどうかもよく分かりませんが、そんな相手にいつものように向き合えるほど、わたし、強くありません。ぜったい泣く、賭けてもいい、やだ、ぶさいくな泣き顔とか、見せたくない……

わたしの名前を呼ぶ彼の声は、どこまでも普段通りで、どうしようもなく泣きたくなりました。

結局、わたしがひとりアワアワしているだけで、わたしの背水の陣な決死の愛の告白は、少しも彼のもとへ届くことはなかったのです。わたしの、独りよがりだったのです。

鼻の奥がツンとして、けれどももう泣きたくはなかったので、ぎゅっとくちびるを噛んで耐えました。

彼はもうすぐそこにいるのが気配で分かりましたが、沈黙を守りました。

「どうしても、出てこないっていうの？」

へえ、僕に逆らうんだ、ふうん、とでも言いそうな彼の口調に、身についた習慣で違う意味で泣きたくになりました。思わずぶるりと震えてしまいます。

「…………ごめんね」

彼の小さな声に、一瞬時が止まったような感じがした。

「…………ごめん」

…………これは、振られた、ということなんでしょうか。

涙が、こらえきれず、外に流れ出しました。

…………想像以上の威力なのですね。

「…………っ、あっあの、…もう、」

耳の近くで大きな鐘を鳴らされたように頭の中がぐわんぐわんして、身体中がじわつと暑くなり、とにかく彼の眼の中にわたしの存在を消してしまいたいわたしはぎゅつと身体を縮こませながら、やっこの思いで彼に応えました。

「だっ、だからっ、気い使わずに、帰って、くださいっ……………」

というか、会いたくない、会えない、告白したとき以上の羞恥と、深い悲しみと、いろいろな感情がごちゃごちゃ混ざり合って、もう、どうしようもなくなっていました。醜い音が喉の奥からあふれてく

るのを聞かれたくなくて、息を止めようとすればするほど、鼻水は出るわ、涙は出るわ。うう、汚い。とにかく、彼がわたしの近くから早く去って欲しくてたまりませんでした。

彼は何も言いません。困っているのでしょうか、告白した相手がぼろぼろに泣いて、きつとすっごくウザいと思っっているに違いありません、それとも、さすがに彼の小指の爪ほどの良心でも、少しだけ痛んでいるのでしょうか。

わたしの嗚咽をこらえようとすする息遣いだけが辺りに響きました。聞こえなかっただけで、彼は、もう帰ったのかしら。あつという間に外は薄暗くなったようです。止まる気配のない涙をシャツの袖口でぐいっと拭いて、もう帰ろうと眼鏡を掛けようとしたところで、

「もう良い？帰るよ」

ひょいっと階段下をのぞきこんだ彼の顔、久しぶりに眼鏡越しではなく、彼と目があって、一瞬ぱーっとしてしまいました。

彼も、わたしを見て、何も言いません。

いつ見ても、やっぱり、綺麗な顔。

……好き、だなあ。

彼のことを好きじゃなくなる日なんて来るのだろうか、そんなことを思いました。

「あ……………」

……………あ？

彼の視線が下の方に向いているのが分かって、自然とわたしの視線も下を辿りました。

と、床についたわたしの右手の甲に、何かが、触れました。薄暗くても堂々とその存在を見せつける、黒光りする、動く物体。

「……っ……！」

……わたしが女の子にあるまじき可愛さとは無縁の悲鳴を盛大に、第三校舎、果ては学校全体に響かせたのは、不可抗力ってやつだとさらに声を大にして叫びたいと思います。

そのつゝ（前書き）

本当に、遅くなりました…

内容を忘れた方もいるのではないかと思います。続けて見てくださっていた方、本当に申し訳ないです。。

彼サイドの話です。

けっこう天然でおまぬけさんかと。

その1、

僕と彼女は、いわゆる幼馴染ってやつだ。

彼女は一言で言うと、バカ。

というか、頭がゆるく、要領が悪く、おまけに運も悪い。

あと頭同様表情筋もゆるいのか、怒られても嫌味を言われてもへらへらへらへらしている。

そして実はどネガティブな人間で、実は泣き虫で、実は頑固で意地っ張りだ。

なんて不器用なんだろうと僕は常々思ってきた。イライラもした。そんなんだから、僕のような人間に良いように使われるんだよ、と全部ひっくるめて、バカ、だ。

そう彼女に言い放つても、彼女は何も言わない。頬を染めて、ただ嬉しそうにへらへらと笑う。

……彼女は、僕に恋心を抱いている。

確かめてみたことはないけれど、自惚れじゃない。彼女は分かりやすすぎるのだ。

僕がどんなヒドイことを言っても（自覚はある）僕の後ろについてまわるのをやめようとしないうし、進んで僕の為になるだろうことは勝手に何でもするし、僕の理不尽な命令にもなんだかんだ言いながら結局は従うし、それが10年以上も続けば、誰でも気付く。

気付いていないと信じているあの子は本当にバカ。そんなところが、面白いんだけど。基本へらへら、でも長く一緒にいる僕には、いろんな表情を見せる。ちょっといじめてやると、絶対泣かなくて、その代わり泣く寸前の顔に僕に見せるんだけど、それが結構かわい

彼女が僕のことを好きで好きでたまらないらしいのは、幼稚園の頃から気付いていたが、放っておいた。わざと突然彼女に優しくしたりして、彼女がテンパるのをにやにやしてからかった。

異変に気付いたのは小学5年の時。彼女が妙にそわそわし始めた。どうやら彼女はようやく僕への恋心を自覚したらしい。

僕が話しかけると、びやっつと変な奇声を上げ、トマトもびっくりなくらい顔を真っ赤にして、それが恥ずかしくてたまらないのか、僕から人二人分くらいの位置に逃げたり、物陰に隠れたり。

……正直、面白くなかったし、ムカついた。

他のヤツとは普通にしゃべるくせに、なんなの。

あんたは、他の女子とは違うだろう？

ずっとこのまま僕だけに挙動不審な彼女の姿を見るのは気分が悪いし、何よりとってもつまらない。裏切られた気分だった。

だから、決めた。彼女の恋心に、これからも絶対に気付いた素振りを見せない。

いつかは彼女もあきらめるだろう。そうすればきっと、今までの僕らに戻れるはずだ。

僕は、一緒にいて楽しくて、おもしろい彼女を気に入っているのだ。

さっそく実行に移した僕は、告白してきた女の子と付き合い始めた。長く続かなかったので、とっかえひっかえと思われても仕方がないようなお付き合いばかりをしていたのだが、それでも彼女には十分効果があったよう。

『……咲君、3組の実島さんと付き合ってるって、ほんと？』

『ああ、そのことだけど、キリ、今日は一緒に帰れないから』

『……そつか。あの、でも、昨日2組の近藤さんと…、その、きつ、きす、してるの、見たんだけど……』

『うん、だから？』

『えつと……、なっ、なんでもない』

正直に言おう。彼女が顔を真っ赤にしておろしているのをにやにやするのも楽しかったが、女の子たちの柔らかい身体も嫌いじゃあなかった。キスをする必要性は見いだせなかったけど、望まれたらしょうがないよね、だって僕には利用しているという負い目があったんだから。

あくまでも本来の目的は、僕に普通の反応を示す彼女に戻すこと。だけど、普通に戻ったら戻ったで、彼女が時々見せる悲しそうな微笑みに、時には僕が目の前で女の子と仲良くして見せても普通すぎる反応を見せる彼女にイライラして、また女の子の身体に溺れた。

僕は、知らなかった。

いや、気付かないふりをしていただけだ。

彼女は、本当に、救いようのない、バカだ。

「すきです」

朝から様子がおかしかった。というよりここ最近ずっと、心ここにあらずで、ぼんやりとされていて、顔色がひどく悪かった。

ちゃんと寝てるの、何か悩んでることもあるの、僕にも言えないようなことなの。

彼女に尋ねたいことはたくさんあって、けれど僕は何故か口にすることができなかった。

代わりに口から出た言葉は、

『キモい』。

彼女は充血した丸い目を潤ませ、何かを言おうとして、結局へらりと笑った。

そんなことがここ最近、ずっと続いていた。

話があるの、彼女は僕に告げた。放課後、第一校舎裏に、来てくれませんか。妙に棒読みで、一目で緊張していると分かるほど頬は真っ赤で肩はがちがちに固まっていた。

嫌な予感は、した。

けれども何故か、嫌ではなかった。

彼女の厚い眼鏡の奥の二つの目が、しっかりと僕を中に閉じ込めて、キラキラと輝いていた。

第一校舎裏には結構お世話になっている。その場所の意味も、分かる。

僕は冷静だった。

「で、話ってなに？」

彼女の口から出る言葉は分かっていた。

僕は彼女の言葉をスルーすればいい。

さすがに彼女も、僕が彼女の告白に聞く気がないことに気付くだろう。

彼女は、何度か口を開いては、閉じて、そうしてぎゅっと目をつぶり、ぱっと目を開けた、

「あなたが、すきです」

……破壊力は、想像以上だった。

心臓が、熱い。

脳の回路が一部ストップ、視力を除く五感が鈍感になり、息さえ忘れるほど、僕は僕に訪れた生まれて初めての衝撃に対応できずにいた。

彼女の愛の告白を、予想していたにもかかわらず、だ。

彼女が、何かを言った。

そして僕をじっと見つめていた。

僕も彼女を見つめていた。

……やがて彼女が驚愕の表情を浮かべ、その丸い、大きな目に涙がじわりと浮かび、僕の前で、背を翻し、駆け去っていくまで、僕はずっと彼女と僕だけの世界にいた。

なんで、僕の前からいなくなるんだ。

君は、僕のことを、好きなんじゃないの？

僕はようやく他の感覚も取り戻した。そして、心臓の異常なまでの高鳴りに、嫌な予感を覚えつつも、本当は嫌ではない自分を笑った。

「ねえ、サキくん、早く行こよよお」

え？……ああ、そうか。

彼女の涙の理由を、僕の腕を自分の腕にからませて媚びた目で僕を見上げる女の子の姿をみとめて理解した。僕は、にっこり笑ってみせた。

「ごめんね、急用が出来たんだ」

腕、放してくれる？そう告げると、女の子は（名前、なんだったっけ？頭がまだ働いていないようだ）ぽかんとしていたが、慌てたようにギョツと自分の胸元に僕の腕を押しつけてきた。あんまり胸には魅力を感じたことは無いんだけどな。まあ、柔らかくて嫌いじゃないけど、でも、今はうっとおしいとしか思えない。

「やだっ！一緒に遊んでくれるって言ったじゃない！彼女のあたしより、栗原さん優先するっていうの？っていうか、栗原さんも意外と図々しいのね、彼女がいるサキくん呼びだしてこんなところで告白するなんて」

いくら幼馴染だからって、気い使うことないよお、と背伸びしてキスをねだるその子の声に彼女に対する嘲りを感じて我慢がならなくなつた。いつもだったら抑えが利くのに、やっぱり僕もいろいろせっぱつまっているようだ。

「じゃあ、別れてくれない？」

僕は笑つた。

余裕はないんだけど、僕の笑顔が他人には毒にも薬にもなることは知ってる。

本当に救いようのないバカだったのは、僕も同じだ。

僕には、彼女が望む言葉を返す資格はないかもしれないけれど。

……今でも、どんな顔をして彼女に会えばいいかわからないけれど。

でも、彼女を追いかけるべきやいけないんだ。
彼女の泣き顔を見るのは、僕だけでいい。

そのろく。(前書き)

最終話です！

そのろく。

もう、まじでしにたい。山奥に穴掘って50年ほど隠れていたい。

「キリってほんつとにいろいろ残念だよね、残念な星の下に生まれてきたのかな？なんか憑いてんじゃないの？」

神社とか行ってみたら？

と心底憐れむような彼の声。

しかし顔が大爆笑寸前なのを隠そうとしない器用な真似をしているのは見なくても分かっていますよ、過去の経験から。

わたしは何度も洗って若干しわしわになった指をさらにハンカチで拭いながら、彼の隣を歩いていました。

あの後、わたしの悲鳴が全校中に轟いた後のことは、できれば一生思い出したくない。

見回りの警備員さんと居残っていた先生が駆けつけた時、わたしは見苦しく泣きじゃくっており（普段なら絶対このくらいで泣きません、ただもういっぱいいっぱいだったのです）、彼は腹を抱えて笑っていました。大変驚かせたことでしょう、彼はすぐさまお行儀の良い猫さんを被り先生方に事情を話すと、なぜかわたしだけ嚴重注意されました。でも先生、彼にも一割二割くらい責任があるんです、とじゃぶじゃぶ手を洗いながら思いました。こんな時間に第三校舎にいたことについて特に言及されなかったのは彼がいたからでしょうか。嚴重注意だけで済んだのも彼のおかげと思えば納得できますが、優等生と成績問題児にこれだけどえらい差があるとは、ちよつとスツキリしません。

というか、ほんと勘弁してほしいのですが。

なぜ彼と仲良く並んで夜道を帰らねばならないのでしょうか……

あ、近所だからか。

「なにさつきからもじもじしてるの？トイレ？」

……デリカシーってものをおかしさまのお腹の中に忘れてきてしまったのでしょうか。

「ん？今なんか言った？」

「いいいいいいええええなんにもいってまじえんっつ」

わたし口に出してたっ！？しかも噛んだっ恥ずかしいっつぐりん、と彼の方を向きそうになって慌てて違う方を向く。

彼は、ふうん、と言ったきり、何も言わない。

……ち、沈黙痛いどうしよう。

彼との距離が、いつもより近い気がする、のも被害妄想でしょうか。わたしが歩くスピードを落としても、彼はずっと隣を歩いています。

怖い、怖すぎます。何を考えているのでしょうか、

どきどきと心臓が痛い位に高鳴っている。トキメキじゃない。断じて！ごめんね、わたしの心臓、今日一日だけで酷使しすぎている気がする、頑張っつね。

もう結構外は暗くなっていて、街灯の明かりがぼつぼつと付いていた。

瞼が重くて、熱い。あと身体がだるい。早く帰って自分の部屋に籠もりたい。正直、彼と同じ空間にいたくなかった。振られた相手とその日に肩を並べて帰るほどみじめなことは無いですね。もうドキドキ疲れたというか、ドキドキしちゃう自分をころしたいというか。ああ、ネガティブループ。

「そういえばさ」

もう無心になろう。出家したい。煩惱を消してやる。そうしたらきつと、生まれて初めての失恋のイタい痛みだつて忘れられるだろう。というか初恋は実らないって最初に言った人は誰だろう、マジだったわ、なぜだか祝杯をあげたい気分だわ自棄になつてるのは分かってます！

「僕を無視するなんていい度胸だね？」

無心、無心、むしんむしんむしんむしん……

「あああ、せつかくいいコト教えてあげようと思つたのに」

「……………」

「ねえつてば」

無限のネガティブワールドから抜け出そうとしてその実どっぷり浸かりまくっていたわたしは手に感じた暖かな感触に覚醒した。

「ね？早く僕を見てよ」

包まれた、わたしの、左手のひら。包んでいるのは、彼の、右手のひら。

あまりに驚いたので、勢い余つて逃げ出そうとした私の手のひらを、彼は力強く掴んだ。

「どうしたの？」

彼は、とてもイイ笑顔だつた。

それは、とても見慣れた類の笑顔で。

「いいいいえつ、なんでもないんだけどつあのっ」
「ふうん、なんで後ずさるうとするの？家はこつちだよ？」

彼の手のひらの、細くて、でも意外にごつごつしている指がわたしの指と指の間に入りこんで、というか、ちょ、ええええええええええええええ

「ねえ、僕の名前、呼んでみてよ」

固まって口を魚のごとくぱくぱくとするしかないわたしの目の前でしつかりと絡まったと手と手を動かしながら、彼は微笑んだ。いつもの彼の笑顔とは、少し違って強張っていて、なんだか緊張しているように見えるのは気のせい、でしょうか。

「……………」
「……………」
「……………」

僕の言うことが聞けないの？とも言うようにひそめられた彼の表情に心の中では必死に弁解する。絡まる指と指を見て、心臓が口からリバースしそうなのです！

きゅつとさらに握りしめられつ、ひゃあああああああ

言え。言うんだ、わたし。

ずっと、呼びたかったでしょ。

名前で呼ばないでくれる？彼にそう言われて、すごく悲しかった。今なら、小学校高学年の彼が女の子に名前と呼ばれるのが恥ずかしかったのだろうと分かるけれど、当時は悲しかったし、傷ついた。皮肉なものです、それがきっかけで、わたしは、彼に恋をしている

ことを知ったのです。

「咲、くん」

案外、するりと彼の名前は口から出た。

彼は少しの間、ぼうっとして、それから微笑った。今まで見たどの笑顔よりも綺麗だと思った。

彼を好きじゃなくなる日は、きっと来ない。煩惱だって一生消えない。やっぱりわたしは、彼が大好きなのです。彼がどんなに最低でも鬼畜でも、天使でも悪魔でも、彼が彼という人間である限り、わたしの中で彼が一番じゃなくなることはないでしょう。盲目的に、彼を好きで居続けるのでしょうか。理由なんて、ありません。ただ、好きなのです。大好きなのです。

やだなあ、目の奥が懲りずに熱くなりました。振られてこの恋を終わらせるために告白を決心のしたのに、振られた拳句に彼のことをもっと好きになっているのです。

その笑顔は、反則ですよ！

「桐恵」

うわあん、そんな良い声で名前を呼ばないで下さい、きゅんきゅんします！

彼がにこっとした。

つられてへらっとしてしまう。

さ、咲くんと（もう呼んでいいんですよね、咲くん解禁ってことですよね！？）少し心の距離が近づいたってやつでしょうか、もう幼馴染でもなんでもいいやこの笑顔が見れるなら！とかいろいろ考えちゃいますよ、本末転倒ってやつですねぇというか、近い、近い

近い近い、心の距離じゃなくて、物理的な距離、つまり彼の身体がわたしの身体に少しずつ近づいて……

直立不動するしかないわたしの耳元に唇を寄せ、彼は。

「手の汗、すごいね？」

……………。

「……………つじゃあ放しますうっ調子のもつてすみませんでしたああっ！！」

「はははははははもう手遅れなんじゃない？」

手が手遅れってなんですかそんなになわたしの汗はアレですかそうですか分かりました拭きますから手を放して下さいよう……………

「ん。だからさ、責任とってね」

「……………そもそも咲くんがわたしの手を無理に掴んだわけでそこにわたしの責任は及ばないむしろ乙女に対して汗という敏感なキーワードを遠慮なく使われて酷く精神的に痛手を負ったというかしにたいたいとかとにかくわたしの方こそ謝罪されるべきというのがわたしなりの見解なのですが」

「なあに？もつとハツキリ言ってくれないと聞こえないんだけど」

「……………いえ、なんでもないです……………」

咲くんは、わたしの手を引つ張って歩いた。

小さい頃に戻ったみたいだ。時々、こうして手をつないで並んで歩いた。先ほどまで嵐の海のように荒れ狂っていた心が、すーっと風いでいく。もちろん心臓はドキドキしていたけれど、それさえも今は心地いい気さえした。

「……あの、咲くん。今日の事は、忘れてくださいね」

「……………なんで？」

「わたし、なんかスッキリしました。成功したとは言えないけれど、でもごちやごちや考えた末の決断でしたから。やりきった感というか、ちよつと大人の階段登つちやつたというか」

「……………ずいぶん低い段差だね？」

「ひどいですねちよつとかっこつけたのに。……………でも、大きな一歩です！やっぱり咲くんはすごいですね！わたしが一回り成長できたのも咲くんのデリカシーゼロな発言のおかげです！さすがです！これはもう才能ですね！」

「どこから突っ込んでいいのか分からないんだけどとりあえず君の僕に対する認識と君の価値観について一度じっくり話し合った方がいいと思うんだ」

「ええ？」

「あと、……………忘れてあげない」

「へ？なんか今言いました？」

「うん。君は救いようもないおバカさんだつて言った」

「う。否定はしませんけれども今の私は箸が転がっても泣ける微妙な精神状態なんですからねっ」

「はいはい」

「あつどうでもよくなりましたねっひどいっ」

「それはそうと、今日はゆっくり眠れるね」

「……はっ、はははっそーですねっ」

「幸恵さんから聞いたんだけど、最近成績の方ヤバいんだって？」

「うっ、えっ、まっまあ、そうですね……………」

「ふうん、まあ、理由はあえて聞かないでいてあげるけど」

「うう、なんだか居心地悪い……………お母さんのほか。なんてことを言ってくれてるんですか……………ごっめーん、でもキリちゃんがおバカ

さんなのが悪いのようへとへらへら笑う姿が目には浮かぶ。

「幸恵さんにキリの勉強見てくれるように頼まれてただけど、早速明日からでいいよね？」

「はっ!？」

「キリが苦手なのって古文と世界史と生物と英語と数学と……あはっ、ほぼ、というか全部だよな？」

「~~~~~」

「いいよ、僕が手取り足取り教えてあげるからには、僕と同じ目標を目指さなくちゃね。キリは要領は壊滅的なほど残念だけど、頭自体はそこまで悪くないだし、きつといけるよ」

頑張ろうね、と微笑った咲くんは、どこまでもいつもの彼だった。わたしは咲くんの意地悪!と心の中で叫びながら、やっぱり彼の笑顔にきゅんきゅんしてしまうのだった。

そのろく。(後書き)

やっと完結のボタンが押せました。。。な、長かったー……途中更新が滞り、お待たせしてしまって、それでも最後まで読んでくださった皆様に本当に頭の下がる思いです……ありがとうございます！

そしてお気に入り登録が増えるたびににやにやしたりドキドキしたりそわそわしたり、かなりの情緒不安定でした。いや、素直にうれしいです(照)ありがとうございます！m(´`´)m

この話は階段下に体育座りで隠れて泣きながらぶつぶつ卑屈に呟いていた女の子が最初に浮かんできたのが始まりです。これだけ書くとかよつとホラーですね^^

あと、幼馴染、いいですよね、幼馴染！(笑)腹黒とかどSとかも心惹かれる設定ですが、咲くんが果たしてそう言えるのか…なんか違う気が…orz

このままだと咲くんがただの最低なひとなので、何とかしたいです……ただ、キリちゃんも天然であんまり人の話を聞かなそうな感じなので、咲くんがさりげなく口説いても気付かなそうですよねっ苦笑しそうです。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます！

これからも精進いたします。。

また次のお話でお会いできたら光栄です。

メリイ山田

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7539t/>

意地悪なひと

2011年9月7日17時18分発行